

從五位下息長真人臣足 一首【年四十四】

五言春日侍宴

物候開韶景  
淑氣滿地新  
聖衿屬暄節  
置酒引搢紳  
帝德被千古  
皇恩洽萬民  
多幸憶廣宴  
還悅湛露仁

物候は時節と云ふと同じ。韶景は春ののどかなる景色。「梁元帝纂要」に春景曰韶景とあり。淑氣是も春ののどかの氣。聖衿は天子の衿懷。屬暄節、暄は「アタタカシ」、寒の反對。此の節を以て會を開くが可しと、天子が思し召したるなり。引は召すこと、搢紳、搢は可なり、縉紳に作るもの不可。束帶の時に笏を大帶に插む。轉じて公卿の義と爲る。西洋の「ゼントルマン」と混ざる勿れ。帝徳、皇恩以下の文字は字の如し。

從五位下出雲介吉智首 一首〔年六十八〕

五言七夕

更 <sub>ニ</sub>	河 <sub>ハ</sub>	華 <sub>ハ</sub>	天 <sub>ハ</sub>	神 <sub>ハ</sub>	仙 <sub>ハ</sub>	桂 <sub>ハ</sub>	菊 <sub>ハ</sub>	時 <sub>ハ</sub>	冉 <sub>ハ</sub>
歎 <sub>ス</sub>	横 <sub>テ</sub>	閣 <sub>ヲ</sub>	庭 <sub>ハ</sub>	駕 <sub>ヲ</sub>	車 <sub>ヲ</sub>	月 <sub>ヲ</sub>	風 <sub>ヲ</sub>	節 <sub>ヲ</sub>	冉 <sub>ハ</sub>
後 <sub>ノ</sub>	天 <sub>ヲ</sub>	釋 <sub>ク</sub>	陳 <sub>ヘ</sub>	越 <sub>ユ</sub>	渡 <sub>リ</sub>	照 <sub>ス</sub>	披 <sub>キ</sub>	忽 <sub>チ</sub>	逝 <sub>テ</sub>
期 <sub>ノ</sub>	欲 <sub>ス</sub>	離 <sub>ル</sub>	相 <sub>ヲ</sub>	清 <sub>ク</sub>	鵲 <sub>ヲ</sub>	蘭 <sub>ヲ</sub>	夕 <sub>ヲ</sub>	驚 <sub>ク</sub>	不 <sub>レ</sub>
悠 <sub>ハルカナルコトヲ</sub>	曙 <sub>ケント</sub>	愁 <sub>ヲ</sub>	喜 <sub>ヲ</sub>	流 <sub>ヲ</sub>	橋 <sub>ヲ</sub>	洲 <sub>ヲ</sub>	霧 <sub>ヲ</sub>	秋 <sub>ニ</sub>	留 <sub>ヲ</sub>

冉、冉は過ぎ行く貌。春も夏も已に過ぐ、今日は已に七月七日と爲る。菊、花の風、は夕の霧を吹き拂ひ、桂花を照す月は蘭洲まで光及ぶ。仙、車と神、駕、織女星と牽牛星は天の鵲橋を渡り、或は天の清流を越えて會合する。而して天、庭に於き、華閣に於て會見を喜び、且忽ちにして離、別を愁ふ。而して此の夕も亦冉、冉。皓、皓たる天河も、遂に澹澹と爲り、翌曉に近づかんとす。更、に悲嘆するは後、期、悠、來年の七月七夕ならでは再會せぬ。其の悠、なるを誰か歎、ぜざる者あらん。

主税頭從五位下黃文連備 一首〔年五十六〕

五言春日侍<sup>ス</sup>宴<sup>ニ</sup>

玉殿風光暮<sup>レ</sup>  
金墀春色深<sup>シ</sup>  
雕雲過<sup>トマ</sup>歌響<sup>ニ</sup>  
流水散<sup>ニ</sup>鳴琴<sup>ニ</sup>  
燭花粉壁<sup>ノ</sup>外<sup>ホカ</sup>  
星燦翠煙心<sup>ニ</sup>  
欣逢<sup>ヨロコブ</sup>則<sup>コトヲ</sup>聖日<sup>ニ</sup>  
束帶<sup>シテ</sup>仰<sup>ク</sup>韶音<sup>ヲ</sup>

玉殿、金墀は、宮中なること分明なり。風光暮、春色深、是れ如何が解すべきや。普通詩の上より論ずれば、風光暮なれば、春色闌にして春色深にあらず。春色深ければ風光暮にあらず。風光半なり。故に今は夕暮の暮と見る。晚宴の氣味を言ふと知るべし。雕雲は歌の美聲なるを言ひ、流水は琴の好音を言ふ。琴の好音に感じて流水も散ずるなり、歌の美聲に感じて雕雲も過まるなり。燭花粉壁外、地上の近景。星燦翠煙心、天上の遠景。則聖日、昇平日と同じ意味。韶音は、天皇の玉音を言ふ。

從五位下刑部少輔兼大學博士越智直廣江 一絶

五言述懷

文藻カ我所カ難カタシトスル  
莊老ハ我所カ好ム  
行年已過レ半  
今更タメニ爲レ何ノ勞セン

學問するは易く、文章を作るは難し。目は高く、手は低し。古今の漢學者と稱する者、大抵此の弊を免れず。殊に今日の漢學者を見るに、此の文藻の十字、大に其の病に中るあたを覺ゆ。此の人古の大博士、今の大博士たる者其れ如何。

從五位下常陸介春日藏老 一絶〔年五十二〕

五言述懷

花 色 花 枝 染<sub>メ</sub>  
鶯 吟 鶯 谷<sub>ニ</sub> 新<sub>ナリ</sub>  
臨<sub>レ</sub> 水<sub>ニ</sub> 開<sub>キ</sub> 良 宴<sub>ヲ</sub>  
泛<sub>レ</sub> 爵<sub>ヲ</sub> 賞<sub>ス</sub> 芳 春<sub>ヲ</sub>

春色を賞して酒を飲み、而して述懷は何人も多く此の如し。

從五位下大學助背奈王行文 二一首【年六十二】

五言秋日於長王宅宴新羅客一首賦得風字

嘉賓韻小雅  
設席嘉大同  
鑒流開筆海  
攀桂登談叢  
盃酒皆有月  
歌聲共逐風  
何事專對士  
幸用李陵弓

長王は長屋王なること疑ひ無し。韻は、嘉賓が韻ふなり、余は歌の意に訓む。小雅は『詩經』に出る字、燕饗に用ゆる樂を言ふ。「大雅」と「小雅」とに就て種種の説あり。余嘗て『詩經國譯』【四四六】に於て詳説せり。設席嘉大同、日本と新羅、國已に異なる。風俗の小異はあるべし、道は大同、相會して嘉すべきなり。鑒流の十字、今日の嘉會を言ふ。開筆海、賓主共に訶を賦し、文を書するなり。攀桂、「魏徵賞舊左右議」に、今時來有運。天門已開。故攀桂之譏未絶。積薪之歎爲深。「杜甫、八月十五夜月詩」、轉蓬行地遠。攀桂仰天高。高位高官に登るを攀桂と曰ふ。登談叢の文字は、異なもの之感あるが、要するに多人會する場合に、古今攀桂者を論談するは普通なり、此の意味も亦然らんと思はる。盃酒皆有月、夜に入て飲猶ほ止まず、月影が盃に移るを言ふ。歌聲共逐風、風の爲め歌聲の遠く流るゝを言ふ。何事專對士、幸用李陵弓、此の二句未考。

五言上巳禊飲應詔

皇慈被萬國

帝道沾<sub>ス</sub>羣生<sub>ヲ</sub>  
竹葉楔<sub>ニ</sub>庭滿<sub>ニ</sub>  
桃花曲浦輕<sub>ニ</sub>  
雲浮天裏麗<sub>ニ</sub>  
樹茂苑中<sub>ニ</sub>榮<sub>ニ</sub>  
自顧<sub>ミテ</sub>試<sub>シ</sub>庸短<sub>シ</sub>  
何能繼<sub>グ</sub>叡情<sub>ヲ</sub>

楔は、被「ミソギ」と同じ、惡氣を拂ひ除くなり。王羲之が蘭亭に於て修「楔事」より、日本に傳來し、三月三日を楔飲と言ふ。又春楔と曰ふ。七月十四日の秋楔に對す。一、二の句對法を用ふ、竹葉、字の如く竹の枝葉を以て楔庭を淨める。而して曲浦には、桃花頗る盛んなり。雲浮の五字は、天上の春景。樹茂の五字は、苑中の春景。詔に應じて詩を賦せんと欲するも、庸才短劣、何ぞ能く叡情の貴きに繼ぐを得んや。

皇太子學士正六位上調忌寸古麻呂 一首

五言初秋於長王宅宴新羅客

一面金蘭席  
三秋風月時  
琴樽叶幽賞  
文華叙離思  
人含大王德  
地若小山基  
江海波潮靜  
披霧豈難期

長屋王を悉く長王と爲したるは、何人の教ふる所なるを知らず。屋の一字を除き、それが敬稱と爲るにもあらず、知らず當時の人は、何等の據る所ありてにや。一面は滿座の意味なり。新羅客の多人數なることを知るべし。金蘭席は、美麗なる席を言ふにはあらず、交誼を厚つするの意。三秋は新秋と改めて可なり。一に對するに必ず三を以てするの兒童對より勝る。風月は秋を以て一番宜しとする時。叶は適の意味に見よ。琴樽は今日の權迎の宴。文華は新羅の客が歸る離思を紋ぶ。人含大王德、長屋王は身皇統に係るを以て斯く言ふならん。地若小山基、此の句意解し難きが、恐くば淮南王小山の事を以て長屋王を頌する意味ならん。江海波潮靜、披霧豈難期、表面文字の如く、江海波靜かなれば、歸舟も定めし容易ならんとの意なれば、極めて平凡なり。側面に日本と新羅と何等の衝突も無ければ、多少の邪魔即ち霧あるも、之れを披除すること期して待つべしとの意でもあらば、此の詩の誦すべき價值が存するなり。今眞意を知り難し。



正六位上刀利宣令 二一首【年五十九】

五言秋日於長王宅宴新羅客一首賦得稀字

玉燭調秋序  
金風扇月幃  
新知未幾日  
送別何依依  
山際愁雲斷  
人前樂緒稀  
相顧鳴鹿爵  
相送使人歸

玉燭調秋序、秋は秋らしき玉燭を點するなるべし。金風と曰つて西風と曰はず。玉と金と對するなり。月光が幃を照す、風が其の幃を吹き扇ぐなり。新知、新羅の客は所謂新知にして、遇ひて未だ久しからず。會ふも忽ち別を敘す、情に於て何ぞ依依たらざらん。依依は別るゝに忍びざる貌。山際には、愁雲、即ちイヤナ雲は斷れてあるが、人前には別離ありて、樂緒稀、人前は人間の意、緒は意の意。相顧鳴鹿爵、『詩經』に鹿鳴篇ありて、行を壯にする時歌ふ。行を壯にするには爵即ち杯酒を備ふ。新羅の客も國を出るときは、定めし鹿鳴を歌はれしあらん。來る時の壯に反對に、別を送るは寂寞の情あるなり。此の篇顧の一字を平とすれば、唐の五律の整正なるものとなる。

五言賀五八年

縱賞青春日  
相期白髮年  
清生百萬聖

岳土半千賢  
下<sub>レ</sub>宴<sub>ニ</sub>當時<sub>ヲ</sub>宅  
披<sub>レ</sub>雲<sub>ヲ</sub>廣樂<sub>ヲ</sub>天  
茲時盡清素  
何用<sub>ニ</sub>子雲<sub>ガ</sub>玄<sub>ニ</sub>

五<sub>ハ</sub>八<sub>ハ</sub>年<sub>ハ</sub>、自賀詩ならん。我邦にて四十を以て初老と稱す、乃ち以て賀するなり。  
縦<sub>ハ</sub>賞<sub>ハ</sub>青<sub>ハ</sub>春<sub>ハ</sub>日<sub>ハ</sub>、少年の時は少年を樂しみ、而して短命なるを嫌ひ、白<sub>ハ</sub>髮<sub>ハ</sub>年<sub>ハ</sub>まで生存  
せんと期す。清<sub>ハ</sub>生<sub>ハ</sub>以下の數句、意義明白ならず、唯結末、清<sub>ハ</sub>素<sub>ハ</sub>、子<sub>ハ</sub>雲<sub>ハ</sub>玄<sub>ハ</sub>、楊雄は  
太玄經を著して玄の去たる所以を辨ず。去は黒なり、素は白なり、心清白であれ  
ば、特別に子雲が太玄經など讀む必要なしとなり。

大學助教從五位下下毛野朝臣蟲麻呂【年三十六】

五言秋日於長王宅宴新羅客竝序賦得前字

夫秋風已發。張步兵所以思歸。秋氣可悲。宋大夫於焉傷志。然則歲光時物。好事者賞而可憐。勝地良游。相遇者懷而忘返。況乎皇明撫運。時屬無爲。一文軌通而華夷欣戴之心。禮樂備而朝野得懽娛之致。長王以五日休暇。披鳳閣而命芳筵。使人以千里羈游。俯雁池而沐恩盼。於是雕俎煥而繁陳。羅薦紛而交映。芝蘭四座去三尺。而引君子之風。祖饒百壺敷一寸。而酌賢人之酌。琴書左右。言笑縱橫。物我兩忘。自拔宇宙之表。枯榮雙遣。何必竹林之間。此日也。溽暑方間。長臯向晚。寒雲千嶺。淳風四域。白露下而南亭肅。蒼煙生以北林藹。草也樹也。搖落之興緒難窮。觴兮詠兮。登臨之送歸易遠。加以物色相召。煙霞有奔命之場。山水助仁。風月無息肩之地。請染翰操紙。卽事形言。飛西傷之華篇。繼北梁之芳韻。人操一字。

聖時逢七百  
祚運啓一千  
況乃梯山客  
垂毛亦比肩  
寒蟬鳴葉後  
朔雁度雲前  
獨有飛鸞曲  
並入別離絃

蟲麻呂は豐城命の後、官式部權少輔なり。張歩兵は誤なり。三國魏に阮籍字は嗣宗。官歩兵校尉に至るを以て。人阮歩兵と稱す。今の詩と關係なし。晉の張翰字は季鷹、官大司馬東曹掾と爲る。秋風起るに因て、吳【故郷】中の菰菜蓴羹鱸魚の膾を思ひ、遂に官を辭して歸る。宋玉は戰國楚の人。屈原の弟子。楚の大夫

と爲る。其の師が放逐せらるゝを悲み、九辨を作り、其の志を述べ以て之を悲しむ。歳光時物、變る毎に詩人之を悲む。而かも勝地良遊は、留連して返るを忘る。況や我皇國は時運、無爲太平なり。文軌、軌は軌躅、文華の車の行く跡、互に通交して、中國【華】も塞外【夷】も均しく欣戴の心を懷き、而かも禮樂は完備して、上下共に懽娛の致を表す。五日休暇、公暇は五日に一度ならん。鳳閣は長王宅を稱して言ふ。使人は星使なり、公使なり。雁池、梁の孝王、曜華宮を作り、兔園を築き、中に雁池あり、池間に鶴洲あり。恩眄は恩顧と同じ。彫俎は肉を盛る器の美麗なるを曰ふ。美麗なるが故に、煥として光あるなり。羅薦は席具の義麗なるを曰ふ。芝蘭四座去三尺、貴きを同うする人の交を芝蘭と曰ふ。而かも禮あり、王と臣下とは去ること三尺隔つ。是れ君子之風なり。祖餞、送別の宴會。酒は百壺あり、敷こと一寸、見れ即ち賢人之耐なり。何必竹林之間、竹林の七賢は各の禮法を無視した遊びなれど、今は禮法正しうして、而かも物我、彼此上下の隔たりを忘る。溽暑方間、秋暑も此の日は聊か涼し。長皐は、修皐と同じ。丙午月を云ふならん。寒雲は溽暑と對す。嶺には寒雲あり、而かも四面は淳風吹く。南亭には白露、北林には蒼煙、加之草は枯れ、樹は落つ。秋興良とに窮り無し。或は酒、或は文、離るゝに従て情遠疎と爲る。人は風物景色の爲め、或は奔命し、或は休息す。乃ち筆を執て、詩を賦し、紙に書す。西傷、北梁、此二事未檢。操一字、分韻の法此の時已にありしなり。

聖時、一本出時に作る、聖時意義有り、出時意義無し。祚運も聖時と同じ。要するに一千七百年の紀元を経たりとなり。梯山客は新羅の客。垂毛我も彼も頭髮の容同じきを曰ふ。寒蟬、朔雁、共に秋日の景。飛鸞曲は別離に歌ふものならん。未檢出據。此の篇平仄整正せざること、諸家と同一なり。